



波に乗るのか，流されるのか

工藤 季之



私が修士課程を修了し，とある企業（食肉大手）の研究所に配属されたのは1990年。まさにバブルの絶頂期だった。もともと理学部の生物学科では，高校の教員以外につぶしがきかず，大学院へ進学したらオーバードクターとよばれる就職浪人が待ち受けていた。そんなところにもバブルの波は訪れ，加えて第何次かのバイオブーム。だからといって，バブルの波に乗って就職したわけではない。当時の大学院は，今となっては古き良き時代の，優秀な後継者を育てるための講座制。おそろしく切れる（優秀ということ）先輩たちが，職もなくアルバイトで食いつないでいるのをみれば，彼らに伍してアカデミアでポストを得ることなど，とうてい無理だと判断したからだ。（実力を補うほどの強運もない。）もちろん，それだけが理由ではない。自分には，個性が売りの研究（オリジナリティーが高いということ）より，地味でも堅実な研究が向いていると考えたからだ。シンダーマンの「続サイエンティストゲーム」という本にも少なからず影響された。

その判断は今でも間違っていなかったと思うが，強いていえば，時代を読み誤っていた。当時は企業の研究所さえもバブルの恩恵に預かり，今となってみれば，とてもバブルな研究にあふれていたのだ。黒毛和牛にはとんでもない高値がつき，これが増産できれば大儲けができると，ウシの計画生産（雌雄産み分け）が私の研究テーマだった。狂牛病やBSEという言葉は，業界でさえもほとんど無関心だった。与えられたテーマをこなしながらも，こんなことやっていて良いのかなと疑問が頭によぎることがしばしば。

そうこうしているうち，気がつくともバブルははじけていた。研究環境はじわじわと悪くなり，日銭を稼げというプレッシャーがやってきた。純粋な研究者であり続けたいなら，とっとと転職するところだが，私にとっては何ということもなかった。もともとイメージしていた企業の研究に戻っただけ。問題は，私にそのノウハウが蓄積されていないことだった。私だけではない。研究所全体に，開発を進めるノウハウがほとんど蓄積されていなかったのだ。（たぶん，こういうところがバブルの本質的な問題だと思う。）そこからは，一人が何役もこなしながらの研究開発となった。私が携わったプロジェクトは，

残念ながら実を結ばなかったもののほうが多いけれど，私自身の中に実を結んだものは多かった。それは，大学では得ることのできない経験である。（技術士試験合格という副産物もあった。）

結局，私は13年間お世話になった企業を後にして，アカデミアに舞い戻った。折しも薬学部新設バブル。戻れると思っていた場所に戻った。別に急に自分の才能に目覚めたわけではない。（ないものは目覚めようがない。）やりかけの研究に自分なりの決着をつけたかったからだ。企業時代にやりたい研究が少しだけで，おかげで学位も取れた。しかし自分自身は全く満足できなかった。幸い，論博修得後燃え尽き症候群にはならなかった。中途半端な状態で研究から遠ざかると，絶対に後悔するという思いがくすぶり続けたのだ。

それからすでに5年。未だに決着のつかないテーマと格闘を続けている。大学の教員という，私にとってまったく新しい仕事を行いつつの研究である。企業人から見れば，さぞや優雅な日々を送っていると思うかもしれない。アカデミアも様変わりしている。今や競争にさらされる教育サービス業。企業と同様で決して甘くはないのだ。私は，決着のつかないテーマに，私なりの結論を出すまで，この世界にとどまるつもりである。（そのあとはどうしよう。）

私は，一見するとラッキーな時代の波に乗っている。ただ単に時代の波に流されているだけかもしれない。強烈な個性があるわけでもなく，輝かしい業績があるわけでもないのに，研究者として20年近く生きてこられたのは，やはり運が良かっただけなのか。周りの状況は激しく変化した，私は，それをうまく利用することもできなかったし，特に不利益を被ることもなかった。常に自分の価値観で判断していたので，結果的にうまくいくこともあったし，いかないこともあった。それだけである。

不満を言い立てて溜飲を下げるほどむなしいことはない。ただ，与えられたポジションやプロジェクトで最善を尽くし，そこで得ることのできる経験やスキルをしっかり身につけること。そんな普通のことを淡々と続けられるのが，私の才能なのかも知れない。「継続は力なり」とか「努力に勝る才能なし」というほど努力家でもないけれど。